

男子新体操研究の概観と 人文社会科学領域における研究の展望

A review of the literature on men's rhythmic gymnastics

野田光太郎 秦 美香子

1 はじめに

男子新体操は、競技人口（現状では約2,000人といわれている）の増加や競技の国内的・国際的な発展を目指している。その目標を達成する一助となるのが、学術研究の充実だろう。しかしながら、男子新体操を対象とした研究は、現時点では極めて少数である。新体操研究を概観したBobo-Arce and Méndez-Rial (2013) でも、男子選手が考察の対象に含まれる論文は2本 (Di Cagno et al. 2009およびBozanic and Miletic 2011) しか挙げられていない。

そこで本研究では、男子新体操研究の可能性を模索するために、まずは男子新体操および新体操を行う男子選手をめぐって行われた先行研究を領域横断的に概観する。そのうえで、とくに人文社会科学的方法による男子新体操研究の可能性を展望する。

なお、以下では、女子新体操とは異なる独自の競技としての男子新体操の選手を言及する際には「男子新体操の選手」、女子新体操に参加する男子選手や、男女混合の新体操を行う男子選手に言及する際には「新体操を行う男子選手」と表記する。

2 男子新体操研究の概観

2-1 系譜に関する研究

一般体操・男子体操・女子体操・新体操・トランポリン・エアロビック・スポーツアクロ体操を統括する国際組織である国際体操連盟 (Fédération Internationale de Gymnastique) は、男子新体操の公式ルールなどを承認していないため、「男

子新体操」という競技は、国際的にルールが整備され共有されているとは言えないのが現状である。しかし、日本をはじめ、スペイン、カナダなどいくつかの国・地域では、男性による新体操競技が行われている。つまり、国際的に共有された単一の男子新体操があるのではなく、複数パターンの男子新体操、あるいは新体操の男子種目が各地で展開されている。

こうした状況の全体像を把握するためには、各国の男子新体操や男子選手による新体操競技のルールを比較研究すること、および、各地の競技がどのような経緯で行われはじめ、互いに影響を及ぼしあったのか（あるいは無関係に発展してきたのか）を検証することが必要であると思われる。しかし、たとえば日本の男子新体操が現在のような形で制度化されていった過程を明らかにする、内容や採点基準、組織化などに注目した学術研究は、管見によれば行われていない。

日本体操協会によれば、男子新体操（団体徒手体操）は1946～47年に行われた第1回国民体育大会にてデモンストレーション形式で演じられ、第2回大会（1947年）で「団体徒手体操」として実施された（日本体操協会 2014）。一方、日本体育協会の発行する資料によれば、団体徒手が競技として記録されているのは第2回でなく第3回（1948年）からである（日本体育協会 1998）。第3回から開始されたという点は島崎（1979）でも言及されているが、その内容は「規定・自由とも徒手体操と倒立・各種転回運動で構成されていた」（島崎 1979：85）。しかし島崎（1979）も日本体育協会（1998）も、日本体操協会（2014）の言及するデモンストレーションについてはふれていない。当時の大会記録や会議資料のいくつかは国立国会図書館近代デジタルライブラリーなどで公開されているが、団体徒手体操に関する具体的な記述は確認することが出来なかった。また、団体徒手体操を主題とした研究（佐藤 1968、森園 1966）は既にまとめられているものの、これらの研究は女子種目に焦点をしばっているため、男子種目に対する言及は見られない。

この例から分かるように、日本の男子新体操が公的な場で行われるようになったのが戦後以降のことである、という認識は、一定程度は共有されている。しかし、それが厳密に何年のことなのか、どのような経緯で競技として、あるいはデ

モンストレーションとして採用されたのか、その後、どのように発展していったか、などの詳細については、必ずしも明らかにされておらず、系譜に関する研究は今後の課題であるといえる。

2-2 スポーツ医科学的アプローチからの研究

男子新体操の選手に焦点をしばった研究として相対的に最も数が多いのが、スポーツ医科学的分野の研究である。ただし、その問題意識は、筋・骨格系のバイオメカニクス、およびスポーツ外傷・障害に特化されている。

スポーツバイオメカニクスの領域では、男子新体操の選手の下肢の筋形態と機能特性（山田・朝倉・田中・熊川・角田 2007）、トレーニングによる筋形態の変化（山田・朝倉・田中・熊川・角田 2009）、一側性筋力と両側性筋力（山田・朝倉・田中・熊川・角田 2010）、膝関節伸展・屈曲運動時における筋力（山田・朝倉・田中・角田 2011）に注目した研究が行われている。同様の視点から男子新体操の選手と女子新体操の選手の比較を行った例もある（山田・朝倉・高橋・田中・熊川・角田 2008）。また、スポーツ外傷・障害に関わる研究では、大学生と高校生をそれぞれ対象に、傷害部位の傾向を調査した野田・山本・松久（2011, 2012）がある。

この他、新体操を行う男子選手の運動能力や筋力に関する研究（Šebić-Zuhrić and Smajlović 2009, Bozanic and Miletic 2011）や、男女の新体操選手の跳躍に関する能力や身体の形態における性差について分析した研究（Di Cagno et al. 2009）がある。これらは独立した競技としての男子新体操を対象にしたものではないものの、広い意味での男子新体操研究に含まれるだろう。

なお、学位論文まで対象を広げれば、スポーツ心理学の見地からの考察など多様な取り組みも行われている（一例は、野口 2011）。卒業論文や修士論文として発表された、こうした萌芽的な研究成果が、積極的に発信されていくことも期待したい。

2-3 ジェンダー研究

文化として男子新体操に注目する際の主要な視点は、ジェンダーである。ただし、ジェンダーの視点からの男子新体操研究は日本語以外の言語で書かれたものが多く、日本ではなく主にヨーロッパ圏の事象を考察の対象としている。ゆえに、男子新体操というよりも新体操を行う男子選手に関するものが中心である。

それは、たとえば英語で発信される一般メディアに見られる傾向と同様である。とくに一般メディアの言説では、新体操という競技が「女子新体操」を連想させるために男子新体操（選手）がステレオタイプに遭遇する、というストーリーがしばしば語られている（一例はOtake 2013）。またオリンピックイヤーになると、オリンピック競技に残された最後の「性差別」として、シンクロナイズドスイミングと新体操にのみ男子種目がないことが思い出されるようだ（事例はReekie 2008, Pilon 2012a）。

学術研究としては、男性の新体操競技人口の（わずかではあるが）増加、あるいはスポーツにおけるジェンダー不平等の問題化を契機として、新体操を行う男女の選手の比較を行うものが2000年代後半以降発表されるようになった。スポーツ医学的研究については前節で示したとおりである。本節ではジェンダー研究の方法論を用いて行われた研究について述べる。

Chimot and Louveau (2010) は、新体操を行う十代～二十代前半の男性が、どのようにして「女性のスポーツ」を行う自身のジェンダー・アイデンティティを構築しているかを、インタビュー調査を元に分析している。Chimot and Louveau (2010) によれば、新体操を女子のチームの中で少年が行うことは、社会の「男らしさ」をめぐる規範と齟齬をきたす、と男親や同性の同級生、チームメイトである少女などに見なされることがあり、そのトラブルを解決する方法として、ヘゲモニックな「男らしさ」とは異なる男らしさが模索されるという戦略が取られる。同様にBéki and Gál (2013) は、スポーツを社会のジェンダー規範が再演される場としてのみとらえるのではなく、スポーツによって新しいジェンダーのパターンが構築される可能性を指摘している。なおBéki and Gál (2013) は、女子の新体操選手のみを対象とした研究であるが、女子新体操とは異なる競

技としての男子新体操にも言及している。Chimot and Louveau (2010) が暗示する、女性的なものを含んだ「男らしさ」を模索するという意味での可能性というよりも、Béki and Gál (2013) は女子新体操と男子新体操がそれぞれ独特な「女らしさ」や「男らしさ」を構築する可能性に言及していることに注目しておきたい。

競技としての男子新体操に注目した例は、Kamberidou et al. (2009) である。Kamberidou et al. (2009) は、ジェンダーとスポーツをめぐる研究領域の中で、スポーツへの女性の排除が高い問題関心を有しているのに対し、ジェンダー化された近代スポーツの中では「男性」もまたジェンダーであることに目が向けられにくいと指摘している。そのうえでKamberidou et al. (2009) では、競技が登場した当初から「女性らしさ」の理想的な表現手段であると見なされてきた新体操に、男性がどのように参入し得るかが考察された。ただし、ここで議論されるのは men's rhythmic gymnastics (以下、men's RG) であり、the Japanese version of men's RG (以下、男子新体操) ではない。

両者の違いは、一例を挙げると、2009年にスペイン体操連盟がmen's RGの国家レベルでの選手権大会を開催したことに関して、スペインをmen's RGを公的に承認した初めての国家として記述している点に暗示されている。むしろ日本の男子新体操は2009年よりも前から全国規模の大会が開催されてきたのであるが、これは、Kamberidou et al. (2009) の事実誤認ではなく、men's RGと男子新体操が異なるものとされているためである。Kamberidou et al. (2009) は、日本の男子新体操のルールについて言及しているが、それは脚注に閉じ込められており、議論の中心には登場しない。議論の焦点は、men's RGが新体操の部門として承認される可能性に置かれている。とくにジェンダー中立的なスポーツのあり方を探ることが論文の主眼であるために、議論は、端的にいえば(女子)新体操への男子選手の参入を期待する立場から展開される。したがって、men's RGを競技として成立させる際に、いわば先行する事例である日本の男子新体操が世界的に普及する、という道筋は当然想定されず、日本の男子新体操とは独立する形でmen's RGのあり方が問われている。

Kamberidou et al. (2009) は日本の男子新体操をほとんど常に 'the Japanese version' と名指しており、当該論文の中では、men's RGが世界標準であるかのように（暗示的にはあるが）強調されている。これに対しては、男子新体操が、それとは異なるものとしてのmen's RGとどのように覇権争いをするのか、あるいは両者を併存させる道を探るのかについて、スポーツをめぐる権力と制度化の問題という視点から相対的に論じる立場が求められるだろう。

また、新体操に関わる男女を対象にした、この他の視点からの研究に Moskovljević and Orlić (2012) がある。Moskovljević and Orlić (2012) によれば、2000年にベオグラード大学（セルビア共和国）スポーツ・体育学部（the Faculty of Sport and Physical Education）では授業科目「新体操の理論と方法論（Theory and Methodology of Rhythmic Gymnastics）」が開講された。これは、スポーツのジェンダー不平等が解消されることで、今後学校の体育教育の一環として男女両方の生徒を対象に新体操が行われることを見越し、体育教員として新体操を指導できるスキルを育成するためのコースであるようだ。Moskovljević and Orlić (2012) は、この授業を受講する男子学生と女子学生の間で、新体操に必要とされる運動能力・音楽能力、態度、習熟度に違いがあるかを分析し、男子学生も新体操の指導者として適性があることを明らかにしている。

2-4 男子新体操研究の特徴

以上のとおり、男子新体操を主たる考察の対象とした研究は、数が極めて限定されている。またその視点も、スポーツバイオメカニクスまたはジェンダー研究の領域に偏りが見られる。

スポーツに対する学術的アプローチは、上記以外にもスポーツ工学や「健康」という視点からの研究など様々である（早稲田大学スポーツ科学学術院 2011）。多くの学術領域の中で、男子新体操に焦点が置かれることはなかったため、どんな視点からの学術研究も望まれている。その全てに言及することは不可能であるため、以下では、本誌の特徴も鑑み、とくに人文社会科学的方法に対象を絞って、男子新体操研究の可能性について展望したい。

3 人文社会科学的方法からの研究の展望

3-1 競技のあり方自体に注目した研究

男子新体操を学術研究の対象として検討する際に、まず問題となるのが、前述したとおり名称とその定義の問題である。名称については、日本語では「男子新体操」で統一されているものの、他言語での表記には揺れがある。現在の日本では名称が問題にならないのは、日本体操協会新体操委員会や中学・高校・大学の部活動といった公的組織の中で「男子新体操」という統一された名称が使用されているという、日本の男子新体操を規定する制度が存在するためである。一方、たとえば英語圏では、基本的には 'men's rhythmic gymnastics' と記述される（あるいは省略形として men's rhythmic[s] と表記されることもある）ものの、'rhythmic gymnastics' の「女性的」イメージを避けるために、'martial-gym' など別の名称も使用されている（この点については3-4で考察する）。

名称の問題は、単に言語圏を横断する際に名称が変わるという翻訳の事情に留まるものではない。そこで名指されるもの自体が食い違っていることは、すでに示したとおり、日本の男子新体操が 'the Japanese version (of men's RG)' と呼ばれることから推測できる。

名指される「もの」の相違、すなわち定義の相違は、何が男子新体操的な表現の蓋然性の範囲とされているか（どんなふるまいが許容され、あるいは理想的なものとして望まれているか）、端的に言えばルールに表出されている。「男子新体操」または 'the Japanese version of men's RG' は、そのダイナミックでアクロバティックな演技が特徴とされることがあるが、それは男子新体操の公式の試合が、そのような演技を可能にするルールによって運営されていることと関係している。一方、たとえば英語圏でしばしば men's RG が「女性的」と言われることがあるのは、日本の男子新体操のルールとは異なる規程によって競技が行われているためかもしれない。

現状では、ルールの相違が明記されないまま、換言すれば、それがどこの男子新体操（あるいは men's RG）なのか言及されないままに、あやふやに一般化された男子新体操／men's RG が語られている。国または言語圏間で男子新体操に

バリエーションがあること自体は必ずしも問題ではない。しかし、各国・各言語圏で共有されているルールなどの決まり事や価値観が単一ではないという認識は、男子新体操を考えるうえで重要である。まずそれは、2-1で前述したとおり、男子新体操の系譜を明らかにする際に無視できない^{注1}。また、競技の国際化という問題に目を向けるときには、それはいっそう不可欠な視点となる。

日本の男子新体操にとって海外振興は、喫緊の課題のひとつである。日本の男子新体操界は、これまでに、海外でのデモンストレーションや指導者の海外派遣を試みてきたが、十分に日本の男子新体操が認知されるようになったとは残念ながら言えない。そこには資金不足などの様々な事情が絡んでいたと推測するが、受入先のもつ男子新体操（またはmen's RG）イメージの分析が不十分であったこと、そして男子新体操を「日本発祥のオリジナルな競技」と前提していたことも、再考が必要である。男子新体操が国際的に活性化していくためには、'the Japanese version of men's RG' を唯一の男子新体操として振興するよりも、受入側の新体操界のあり方に沿った'a version (or an international version) of men's RG'（「あるひとつの男子新体操」、または「ある国際バージョンの男子新体操」）が編成されていくことが必要である。そのための戦略的事業を、最も男子新体操を盛んに行っている日本が積極的に進めていくなれば、男子新体操／men's RGの複数性を明らかにする学術研究が、そうした事業を支えるひとつの有効な基盤となるだろう。

注1：さらにいえば、ルールは過去に変わってきただけでなく、これから変わっていくものでもある点にも留意が必要である。選手たちが試合のたびに構成を創造的に完成させ、演じる、そうした毎回の営みによって、ルールは常にアップデートを求められている。どういった創造性が、現行ルールにどのような変化を要求するのかを客観的に記述し検証していくことも、男子新体操の今後の展開を見極めるうえで必要な作業ではないだろうか。

3-2 教育と課外活動をめぐる研究

日本の男子新体操が、他国とは異なり一定程度の競技人口と競技内容を維持しているのは、学校教育の中で課外活動として制度化されているためでもある。それは逆に、高校や大学といった教育機関の中で行われている男子新体操が衰退すれば、競技自体が危機を迎えるだろうことを意味している。クラブチームやジュニアを育成する環境が各地方にあるわけではないため、中学・高校で男子新体操に出会ったという選手は多い。でありながら、課外活動として男子新体操が行われることの意義は、これまで検証されてこなかった。

大束他(2012)は、正課の教育課程とは別に行われる課外活動を(1)従来型課外活動(クラブ・サークル活動)、(2)社会連携型課外活動(インターンシップ、サービスラーニングなど)に大きく分類したうえで、(1)のうち体育・スポーツ系課外活動が、不安の軽減、忍耐力、責任感、積極性、自己実現意欲、競争意欲、判断力、団結心、協調性、集中力といった心理的対処能力を身につける場として機能していることを、先行研究の知見をふまえて指摘している(大束・新矢・湯川・富川・長光・平田・山 2012)。ここでは、スポーツの競技ごとの教育効果の特徴については明らかにされていないが、野球やラグビーを行うことによって培われる能力と新体操を行うことによって培われる能力が全く同様であるとは限らない。この点について検証するために、競技ごとの教育効果を明らかにする研究が必要となるように考えられる。

加えて、課外活動による教育効果が卒業後のキャリア形成に及ぼす影響の有無について、卒業生調査を行うことによって考察することができるだろう。たとえば大学に焦点を置けば、いくつかの大学では、学生選手は在学中かなりの時間を練習に費やす生活を送っている。それが試合の成績にどれだけ結びついたかだけでなく、選手の卒業後のキャリアに及ぼす直接的・間接的な影響を分析すれば、上記の大束他(2012)の分類(1)従来型課外活動に属するスポーツ系部活動が(2)社会連携型課外活動がねらいとしているキャリア教育という側面も兼ね備えている可能性を検証することができるだろう。従来型課外活動がキャリア形成に直接的な影響を及ぼす事例は決して多くないとは推測されるものの、そうした

事例が分析されることによって、これまで指摘されてこなかった視点から課外活動の教育効果を検証することが可能となるかもしれない。また男子新体操を対象にこうした教育効果を検証する研究が行われることは、男子新体操が教育機関の中で行われていることの意義を再考するうえでも重要な試みといえるのではないか。

一方、指導法という視点からの研究もさらなる発展が期待される。男子新体操のテクニカルな指導方法を示したのものや、個別の指導経験を述懐したものについては、数は多くないものの書籍として数点出版されている。技術向上のための効果的な指導法が開発されることは重要であるが、清水（2011）によれば、運動部の指導に関する議論は個別の指導の方法論に偏り、その理念に焦点を置いた研究は十分行われていない。

男子新体操は、技能の向上のみにとどまらず、演技の構成など生徒・学生の創造性を指導することも重要であり、その点において他の運動部活動とは質的に異なる可能性がある。一方、コミュニケーション能力やチームワーク能力の向上など汎用的スキルを習得させる点では、他の運動部活動との共通性が見出せるだろう。同時に、創造性の指導や汎用的スキルの指導について考察することは、部活動の範囲を超えて、教育に関わる研究に広く寄与することができるのではないかと考える。

たとえば、男子新体操の指導をめぐるのは、（1）運動技能の指導、（2）態度技能の指導、（3）認知技能の指導（以上は向後（2012）による）、（4）創造性の指導、という4つの視点からの分析が可能だろう。4つめの「創造性の指導」は、芸術教育などと異なり、男子新体操の試合に適用されるルールを考慮に入れた、ある意味では「制限された創造性」の指導である。それは先述したとおり、他の運動部活動には見出しにくい特徴であるが、同時に、潜在的には他の運動部活動でも指導されていると推測される。この点について考察することで、スポーツにおける創造性の指導という、これまで前景化されにくかった側面に光を当てた研究が可能となるのではないか。

3-3 地域スポーツとしての男子新体操研究

前項に示したとおり、男子新体操は学校教育の中では運動部活動として行われてきたが、それに加えて地域のスポーツクラブなどで実践されている例もある。男子新体操を研究するうえでは、こうした場に注目する必要もあるだろう。

前述のとおり、選手が男子新体操を始める時期は一般に中学・高校時代であることが多いが、実際には、かなり高いレベルの選手でなければ大学で継続して新体操を行うことはあまりない。それは、大学生のための試合が少なく、また世界大会が存在しないことから、男子新体操を継続するメリットが少ないためである。さらに、プロとして活躍できる場がほとんどないため、トップレベルの選手でも多くの場合は大学卒業と同時に引退せざるを得ない。男子の競技スポーツのピーク年齢は一般に20～30歳と言われているのに対して、大学卒業が引退を意味する男子新体操の現実、競技スポーツとして適正な状況とはいえない。

この問題状況を改善するには、大学卒業後の活躍の場となる実業団や地域クラブチームなどの設立が望まれる。ただしそうした団体が持続可能な運営を行うためには、男子新体操が一定程度以上の人口をもつ競技となっていく必要が同時に求められると考える。その方策は、前述した国際化や、国内の教育機関の中で行われる運動部活動の充実、そしてもうひとつは、地域スポーツクラブの振興である。

間野（2011）によれば、1990年代以降は少子化の進行によって部活動が成り立たない学校が出始め、スポーツ振興の受け皿としての「地域」が注目されるようになった。しかし地域スポーツクラブには、財源の不足、活動拠点や指導者確保の難しさといった課題もある（間野 2011）。

男子新体操は競技人口が少ないために、安定したクラブチーム運営が必ずしも見込めるわけではない。そのうえ、特殊なフロアマットの必要など、設備面での制約もある。そうした困難を解決しつつ、地域で、あるいは学校教育機関と地域の連携によって選手を育成していくことは、男子新体操の将来的な発展のために不可欠である。

こうした実践に寄与すると考えられるのが、スポーツ経営学の知見からの研究

である。男子新体操を行う地域のスポーツクラブの運営実態を把握する基礎的な調査研究が行われ、地域スポーツクラブ運営の望ましいあり方が提案されることが待たれる。

3-4 ジェンダー研究

本項と次項では、主にスポーツ文化論的アプローチからの研究を展望したい。先行研究からはジェンダー研究の視点のみ見出すことができたが、次項ではそれに加え、メディア研究の視点からの研究も展望する。

なお、本論が行った先行研究レビューではスポーツ文化論的アプローチから行われた男子新体操研究として、ジェンダーの視点から行われた研究しか発見することが出来なかった。しかし、新体操のみに焦点を置いたものに限らず、体操の系譜をたどり新体操（団体徒手体操）がどのように競技として構成されていったかを明らかにする研究（一例は寶學・清原 1999）なども先行研究として広く参照することで、男子新体操に関する系譜学的研究が充実すると考えられる。

Kamberidou et al. (2009) では、スポーツ競技を性別によって二元化することの問題が論じられており、その視点からは男子と女子を二分する日本の男子新体操／女子新体操のあり方は、あまり理想的なものとは位置づけられていないようであった。しかし、たとえばサッカーのジェンダー二分法と、新体操のジェンダー二分法は、同じように語れるものだろうか。

Connell (2009) によって指摘されているとおり、社会に通底する単一の「男」「女」があるわけではない。新体操には新体操のジェンダー二分法があり、それは他のスポーツのジェンダーと同一のものではないし、他の文化的事象のジェンダー二分法に還元できるものでもない。そもそも、「男子新体操」と「女子新体操」をジェンダーによって対称的に二元化された「ひとつの新体操」に還元すること自体が、まず問われなければならない。その実践をつぶさに見れば、両者の非対称性が浮かび上がるのではないだろうか。

したがって、女子新体操と男子新体操のそれぞれのジェンダー編成を明らかに

する前に、「ジェンダー中立的」なものとしての新体操を「男女混合の新体操」と言い換え可能なものとして模索するKamberidou et al. (2009) の議論は、いささか性急すぎる。まずは、男子新体操のジェンダー編成を明らかにする研究が、男子新体操研究の一環としては期待されるだろう。

加えて、とくに英語圏で男子新体操が語られるときの、武道との接合という言葉も注目に値する。しばしば男子新体操 (men's RG) は、その源流のひとつに武道があることが強調されたり、動きが武道的であると表現されたりする。^{注2}それは単なるオリエンタリズム、つまり、日本によって主導される競技であるということから、そのパフォーマンスに「武道的な本質」が発見されてしまう、ということではない。そうではなく、なんとかしてジェンダーにまつわる差別的な視線を回避しようとして「オーセンティックな男子新体操は武道的である (=たくましい、男らしい)」というストーリーを持ち出していると考えられるのである。たとえば、*The New York Times* および *International Herald Tribune* の記事では、「新体操」という名称では男性お断り (female-only) のスポーツのように聞こえてしまうという事情から、カナダやカリフォルニアで男子新体操が 'martialgym,' 'men's martial gymnastics' (いずれも「(男子) 武道体操」の意) などの名称で指導されている、という事例が紹介されている (Pilon 2012a, 2012b)。また新体操に関するウェブページの掲示板でも、同様の理由から 'rhythmic' の語を避け 'men's synchronized gymnastics or men's gymnastics with apparatus' (「男子シンクロナイズド体操または手具を用いた男子体操」の意、団体種目と個人種目に相当すると思われる) などの名称に変更する提案なども見られる (Rhythmic Gymnastics Message Board 2005)。

Martialgymは、団体の公式ウェブサイトなどでは「六合八法新体操」とされ

注2：たとえば井上俊 (2000) は、近代日本においてスポーツと武道が相互に影響しあいつながりながら発展してきたことを指摘している。その意味において、男子新体操と武道は確かに無関係ではないが、ここで述べているのは、そうした系譜的な視点からの議論のことではない。

ており、男子新体操と中国武術の六合八法拳を混ぜ合わせたものと解説されている（Nikkei National Museum & Cultural Centre 2014, The LHBF MartialGym Center 2014）。ゆえに、実際には単に「女の子のスポーツ（a girl sport）」「女々しい（sissy）」と非難されることを避けるためだけでない事情から、「男子新体操」とは異なる名称が使用されているのかもしれない。とはいえ、一般メディアで男子新体操が語られる際に、ジェンダーの問題が言及されること自体が注目に値するだろう。

3-5 メディア研究

井上（2012）が指摘するように、スポーツはメディアにとって重要なコンテンツであり、一方メディアはスポーツにとって、そのスポーツの楽しみ方を教えたりする手段であるという、相互に依存する関係が成立している。男子新体操も、テレビや新聞といったマスメディアで紹介されることにより認知度が上がることを期待してきた部分もあるが（一例は、千葉 2010）、メディアとの関わり方に対する検証は行われていない。

杉本（2005）によれば、近代スポーツは有用規準（勝つという目標に向かっていかに有効な手段をとりうるか）や原則規準（ルールに従っていかにフェアプレイをするか）によって判断されてきたが、とりわけ現在では、美しいバッティングのホームランに魅了されたり、それを阻止しようとピッチャーがバッターに挑戦する姿に共感したりする、といった感性的な部分、すなわち「共感規準」もスポーツ（の魅力）の重要な構成要素となってきた（杉本 2005：150-151）。とりわけ、スポーツでありながら芸術・エンタテインメントの要素も持つ男子新体操を理解するためには、演技者と観客の間に発生する感性的なコミュニケーションを把握することも必要である。メディアの言説を分析することは、その手段のひとつとなるだろう。

男子新体操を扱うメディア言説には（1）報道・ドキュメンタリーとして発信されるもの、（2）コンテンツとして発信されるもの、がある。

報道として発信されるのは、主に試合結果や競技自体の紹介などであるが、加

えて、男子新体操が国体の休止種目となった2008年前後には、新聞報道などで競技の存続の危機が語られている。それらの記事の構成を見ることによって、男子新体操が他のスポーツと比べてどの程度注目されているのか、あるいは男子新体操をめぐるイメージの編成などを明らかにすることができると思う。

一方、コンテンツとして発信されるものは、男子新体操がどのように物語化されているかを推測するための手がかりとして活用できるのではないと思われる。2000年代末には、テレビドラマ及び舞台「タンブリング」(TBS、2010他)や、ドキュメンタリー映画「FLYING BODIES」(中野裕之、2013-2014、フライングボディーズ製作委員会)、小説『コカンセツ!』(南々井梢、2009、徳間書店)、マンガ『新体操舞技』(宍戸道子、2007、スクウェア・エニックス)、テレビCM(一例はカルピスソーダCM、2008)などによって、男子新体操は物語化されている。また、それらに先立ち1990年代末には、マンガ『男の華園』(桑田乃梨子、1998、白泉社)も発表されている。極めて数が限定されているとはいえ、こうした作品の中には、男同士の「絆」をめぐる物語(困難に共に立ち向かうことで関係を深め理解し合う人間関係という描写)や、一般的にあまり知られていないスポーツへの参加をめぐる物語(無知による軽視から始まり、内容を知るにつれて競技へ魅了されていき、成長していく、といった物語のパターン)という点で類似点が見られ、「男子新体操」がどのようなスポーツとして(あるいは、スポーツだけでなく芸術にも近いものとして)意味づけられているかをうかがい知ることができるだろう。

こうしたイメージ化とは異なり、男子新体操をめぐるメディア言説には、競技自体に対する揶揄やネガティブな反応もある。これは、主にジェンダー研究をめぐる項で言及した点ではあるが、ジェンダー研究の視点からだけでなく、メディア研究の視点からの検証も行われるべきだろう。ジェンダー研究の視点から分析が行われる場合には、何が「男らしさ」であり、何がそれと対置される「女らしさ」なのか、に焦点が置かれる。社会のジェンダー規範から類推される「男らしさ」に還元できないものとして男子新体操を評価するにせよ、演技を通して表現される「男らしさ」によって評価するにせよ、その切り口がジェンダーの二分法

を前提しているのがそうした研究の特徴となる。

しかし、男子新体操をめぐる否定的な言説の意味を把握するためには、そうした視点だけでなく、メジャー／マイナースポーツの語られ方の相違（マイナーなスポーツは、より軽く語られやすい、など）、記事の書き手や発表媒体の特性ごとの相違などといった、より多様な視点からのメディア研究が行われる必要がある。

4 おわりに

本論では、男子新体操をめぐる研究を概観し、人文社会科学領域で可能と思われる男子新体操研究を展望した。自然科学領域で行われる学術研究の整理と体系化は今後の課題としたい。

また、本論では入手困難なため正確な内容を確認できないものがあつた。参考までに書誌情報を示しておきたい。

(1) Šebić-Zuhrić, Lejla; Manić, Gordana; Bonacin, Dobromir; Hrnjević, Ivan, 2008, 'Relacije bazično-motoričkih sposobnosti i stilizovanih kretnih struktura u muškoj ritmičkoj gimnastici (男子新体操における基本的な運動能力と様式化された動きの構造)', *HomoSporticus*, 10(1), 18-21.

男子新体操を教える3ヶ月のプログラムを受講した71名の大学生を対象に、動きの習得度について分析したもの。要旨は<http://bib.irb.hr/prikazi-rad?lang=en&rad=325966>にて確認できる。セルビア語で書かれている。

(2) 张敏、王硕、闫晓、2012、「我国体育学院表演专业男子艺术体操课程设置的 研究（中国の体育大学学士教育課程における男子新体操課程の設置に関する研究）」『西安体育学院学报』29(1)、120-123.

理論・技術・能力の3分野から成る、男子新体操のコースを設置する計画に関わる検証。要旨はhttp://en.cnki.com.cn/Article_en/CJFDTOTAL-XATY201201027.htmにて確認できる。簡体中文で書かれている。

文献

[日本語]

井上俊、2000、『スポーツと芸術の社会学』世界思想社

井上俊、2012、「スポーツとメディア」『よくわかるスポーツ文化論』ミネルヴァ書房

向後千春、2012、『いちばんやさしい教える技術』永岡書店

佐藤たけ、1968、「一般体操（団体徒手体操）の発展的動向の一考察」『東京女子体育大学紀要』3、75-81.

島崎旺、1979、「新体操の考察」『千葉大学教育学部研究紀要』第2部28、83-88.

清水将、2011、「高等学校における運動部活動の教育課程上の位置づけに関する検討」『東亜大学紀要』14、17-32.

清野惇、2014、「運動部活動の指導と暴力の行使について」『修道法学』36(2)、123-144.

千葉末次、2010、「男子新体操ドラマから」『RG』22、42.

日本体育協会、1998、『国民体育大会50年のあゆみ』（本編・競技記録編）日本体育協会

日本体操協会、2014、「男子新体操」日本体操協会 (<http://www.jpn-gym.or.jp/wp-content/uploads/2014/05/bbf4d27533bb90c8577361c8cbe1bb80.pdf>、2014年10月17日取得)

野口勝弘、2011、「メンタルトレーニングから見る男子新体操選手の心理特性」花園大学文学部卒業論文

野田光太郎・山本清文・松久ミュキ、2011、「男子新体操選手におけるスポーツ外傷・障害の実態についての研究」『花園大学文学部研究紀要』43、53-69.

野田光太郎・山本清文・松久ミュキ、2012、「男子新体操選手におけるスポーツ外傷・障害の実態についての研究——高校生を対象として」『花園大学文学部研究紀要』44、59-72.

寶學淳郎・清原泰治、1999、「日本の近代体育の形成過程におけるダイオ・ルイスの体操の影響——『男女及び子供の新体操』（第15版）と『新撰体操書』の比較を中心に」『高知学園短期大学紀要』29、21-32.

間野義之、2011、「地方自治体」早稲田大学スポーツ科学学術院編『教養としてのスポーツ科学』大修館書店、132-135.

守能信次、2007、『スポーツルールの論理』、大修館書店

森園澄子、1966、「団体徒手体操の一考察」『東京女子体育大学紀要』1、56-62.

山田小太郎・朝倉正昭・高橋佑輔・田中重陽・熊川大介・角田直也、2008、「男女新体

操選手における下肢の筋形態、筋出力及び無酸素性パワー発揮特性」『国士舘大学体育研究所報』27、7-13.

山田小太郎・朝倉正昭・田中重陽・角田直也、2011、「男子新体操選手における膝伸展筋力が後方伸身宙返りの高さに及ぼす影響」『国士舘大学体育研究所報』30、1-6.

山田小太郎・朝倉正昭・田中重陽・熊川大介・角田直也、2007、「新体操選手の下肢筋形態と筋出力発揮特性」『国士舘大学体育研究所報』26、15-20.

山田小太郎・朝倉正昭・田中重陽・熊川大介・角田直也、2009、「男子新体操競技の継続的トレーニングに伴う下肢の筋形態及び筋出力発揮特性の変化」『国士舘大学体育研究所報』28、1-5.

山田小太郎・朝倉正昭・田中重陽・熊川大介・角田直也、2010、「男子新体操選手の膝関節伸展・屈曲運動における両側性機能低下」『国士舘大学体育研究所報』29、1-6.

早稲田大学スポーツ科学学術院、2011、『教養としてのスポーツ科学——アクティブ・ライフの創出をめざして』大修館書店

[英語]

Bozanic, Ana, and Miletic, Durdica, 2011, 'Differences between the Sexes in Technical Mastery of Rhythmic Gymnastics,' *Journal of Sports Sciences*, 29(4), 337-343.

Connell, Raewyn, 2009, *Gender*. 2nd edition. Cambridge: Polity Press.

Di Cagno, Alessandra, Baldari, Cario, Battaglia Claudia, Monteiro, Maria Dolores, Pappalardo, Alessandra, Piazza, Marina, and Guidetti, Laura, 2009, 'Factors influencing performance of competitive and amateur rhythmic gymnastics: Gender Differences,' *Journal of Science and Medicine in Sport*, 12, 411-416.

Kamberidou, Irene, Tsopani, Despina, Dallas, George, and Patsantaras, Nikolaos, 2009, 'A Question of Identity and Equality in Sports: Men's Participation in Men's Rhythmic Gymnastics,' *Nebula*, 6(4), 220-237.

The LHBF MartialGym Center, 2014, 'The LHBF MartialGym Center,' The LHBF MartialGym Center, (Retrieved October 13, 2014, <http://www.martialgym.info/#>).

Moskovljević, Lidija, and Orlić, Ana, 2012, 'Relations between Students' Abilities and Attitudes and Success in Rhythmic Gymnastics: Gender Specificities,' *Physical Culture*, 66(2), 129-137.

Nikkei National Museum & Cultural Centre, 2014, 「六合八法新体操」, Burnaby, BC:

- Nikkei Centre, (Retrieved October 13, 2014, <http://centre.nikkeiplace.org/shintaiso-j/#>).
- Otake, Tomoko, 2013, 'Image-Flip for Male Rhythmic Gymnasts,' *McClatchy - Tribune Business News*, August 18, 2013.
- Pilon, Mary, 2012a, 'For Men, Sport's Stigma Dampens Appeal,' *The New York Times*, August 11, 2012.
- Pilon, Mary, 2012b, 'Stigma Keeps Sport Women-Only: Rhythmic Gymnastics Unlikely to Be Added as Men's Event Anytime Soon,' *International Herald Tribune*, August 13, 2012.
- Reekie, Thomas, 2008, 'Equality? Having it both ways? Where is men's synchronized swimming? Or rhythmic gymnastics?' *The Vancouver Sun*, January 29, 2008.
- Rhythmic Gymnastics Message Board, 2005, 'Rhythmic Gymnastics Message Board: Your Opinion on Men's Rhythmic Gymnastics,' (Retrieved October 17, 2014, <http://rsg.net/forum/>).
- Šebić-Zuhrić, Lejla, and Smajlović, Nusret, 2009, 'Qualitative Changes of the Motor Abilities and Stylized Movement Structures in Rhythmic Gymnastics under Influence of the Kinesiology,' *Homo Sporticus*, 1, 24-29.